

## 講演会 国際社会における才能教育

東京外国語大学教授 中 島 嶺 雄

昭和54年7月17日 才能教育研究会関東地区指導者例会

東京・中野サンプラザ

ただ今御紹介にあずかりました中島でございます。才能教育の皆さんとは、本当に長い間ごぶさたをいたしておりました。たまたま全国大会二十五周年のレセプションが行われました時に、鈴木鎮一先生には数年ぶりであり、そして松井先生や鈴木静子先生、そして村上豊君や鈴木（石川）裕子さんには実に二十数年ぶりにお会いいたしました。

私は松本音楽院のいわば第一期生でございますが、会誌の『才能教育』にも書きましたように、少し年令が高かったこともあって、大変はみでた存在でございました。たゞ、村上豊君が『才能教育』に書いている「あの頃あの時」に写真がありますが、昭和二十二年の松商学園で、松井先生とその左に奥村先生がおられ、その前の前に私がいるのです。本当にそういう頃から才能教育にお世話になったわけですけれども、現在は全く違った世界にはいり込んで、中国研究そしてアジアの国際関係などを研究いたしておるわけでございます。

今日のテーマとしては、「国際社会における才能教育」などという大変大きなことを私自身が申し上げたのですが、さて一体どんな事をお話ししたらよいのか、実は今日ここに

来るまで迷っていたような次第でございます。もう才能教育自身が非常に国際化しており、最近の（東京サミットでの）カーター大統領の訪日に際しては、あのような（六月二十一日アメリカ大使館公邸における石川裕子先生のエミリーちゃんへのレッスン）機会がすでにありまして、ある意味では文化外交の一端を担っているわけですね。で、ところが一般には今回初めて、あのような形で知らされたのだらうと思えます。そうしますと、すでに才能教育自体がもっているある種のコスモポリタンな性格と、一般の才能教育に対する認識との間には、何かまだギャップがあるかも知れない。私自身は昨年すでに才能教育の皆さんがアメリカで演奏されて、カーター大統領が大変感銘して壇上で鈴木先生と握手をされたあの光景をきいて、これはたいへんな文化外交である、これからの日本はいろいろな意味で外交の内容的な多元化を必要としますが、まさにこれはすぐれた文化外交だと強く感じました。

つまり外交と申しますのは、本来は外交官同士が華麗なセレモニーを行って、その結果を文章にとじ込むことが外交という言葉の発端なのです。ディプロマット (Diplomat) 或はディプロマシー (Diplomacy) 云々

言葉は、ディプロマ(Diploma)というのが資格を文書として与えるということに通ずると同じように、何か文章をとり込んで、これをつづって保存しておくというところからくるのです。本来、外交というのはそういうものだったのです。

例えばウィーン会議、そこで会議は踊りました。しかしながら、あのウィーン会議が踊っている中で、ヨーロッパの諸勢力の一種のバランス・オブ・パワーが議せられ、そして又、それは大変華麗なセレモニーが行われ、御承知のようにウィーン会議を舞台にして、多くの音楽家が活躍したわけですが、その頃は文字通り古典外交であったわけです。

ところが近代以降、やがて外交は国家間の取り引きになります。特に最近では国際政治の厳しい現実の中で、外交というものが持っていた本来の意味が失われ、熾烈な国際戦略の角逐の場になっていきます。そういう状況に直面しますと、私たちはもう一度、ある種の文化外交といったものが非常に重要になってきたことを感じます。しかしそれは一口に文化外交といっても中々むずかしい問題であり、お互いの国は、夫々の民族のいろいろな個性をもってありますから、文化外交は成功すれば非常に爽やかな感じを残しますけれど、もしそれが成功しないと、今度は中々とりかえしのつかない後遺症を残します。文化摩擦が生ずるのです。これを私たちはカルチュラル・コンフリクトといいます。折角なにかわれわれが文化外交だと思ってやったことが逆効果になることが沢山ある。

まさにこの点、才能教育を通ずる音楽という普遍的な価値、そして誰もが子供たちの演奏をきいて感激し得るといふ、このインターナショナルな性格自体というものは、もっと多くの日本人が認識していいのではないでしょう。この間のサミットの前に大平首相がアメリカに行きました。丁度あの時、私は外務省の外交政策懇談会の委員をやっていますから、今度のサミットに至るまでいろいろの諮問をうけていたわけですが、大変な準備がなされました。そうしてこのサミット前の大平訪米というものは、サミットが成功するかどうかの一つの大きな賭でした。

日米関係は、今日非常に大きな摩擦をふくんでおりますから、若しあの時にカーター大統領が、貿易の具体的な数字を挙げて、つまり年間に百十億ドルもの黒字が日米貿易だけで日本側に溜ってしまうという、この貿易アンバランス、それ程日本の経済力は強いわけですけれども、そのことに苛立っているアメリカが、具体的な数字をあげて何か言ってきたらどうしようと、実に薄氷を踏む思いでワシントンに行ったわけです。

ところが開口一番、カーター大統領が言ったことは、「私の娘のエミーは日本のスズキメソッドでバイオリンを習っています」という言葉でした。そしてこの一言が実は日本外交を救ったと言ってもいいんですね。その一言によってワシントンでの日米首脳会談は、具体的な数字を並べてとやかく議論するという性格から、一変して首脳者同士のいわばステーツマンとしての話し合いの場に転じていったわけがあります。そして具体的な数字については、事務レベルでお互いにつめるということになった。これはある意味で大平首相を救い日本外交を救ったと言えるかも知れません。で、カーター大統領がそういう発言をしたのは、まさに、カーター大統領の娘が才能教育のスズキ・メソッドで習っていたというところ、そしてスズキ・メソッドというものがそれまでの普遍性を獲得していたことだと思います。それは私にとって大変うれしいことでありました。

したがってこのことの意義を、大平内閣のブレイントラストの政策委員会でも、外務省の外交政策委員会でも私はその席上で申し上げ

げました。スズキ・メソードの才能教育が、すでに今日の躍動する国際社会の中で日本外交を救ったと言えるかもしれない。しかしながら同時に又、これまで才能教育というまに皆さまざま方が努力されてやってきた民間の運動は、運動というのは語弊があるかも知れませんが、これは全く政府とか外務省、或は文部省の管轄下にあつてその保護をうけてやってきたものではありません。

又、一方、日本のいわば官学の音楽の世界では、ややこしい官学アカデミーみたいなものがあるわけですが、全くそういうものから才能教育はインディペンデントで、こういう皆さまざま方の民間の運動の積み重ねがた今のような結果を、作為によるものでなく偶然に生んだとするならば、これはやっぱり大變に誇つてよいことあります。結局、文化とか芸術とかいうものは、国が音頭をとつてこれが日本の文化外交だという形で旗ふりをしてら駄目なんだということを、おのずと意味しているのかも知れませんか。皆さまざま方の長い御努力が大きな実を結んだ例だと思ひます。それは非常に爽やかな印象を与えたと思ひます。

これに対して、文化外交での大變まずい例

の一つを挙げてみましょう。

それは、日中国交正常化直後のことでありました。思い起こしていただきたいのですが、一九七二年田中内閣によつて日中關係が一挙に正常化し、日中ブームがわき起こりました。それ今度は中国だという形で、大變な中国熱が生じたことは御承知のとおりです。その時、日本は、先ず国交樹立のお祝いをかねて何を中国にたそうかということになり、實際にだしたのは何と大相撲でした。確かに相撲は日本の伝統的な国技ですし、それを誇ることに私はやぶさかではないのですが、その発想の根底にあつたものは、それ日中国交樹立だ、そして次は大相撲北京場所だというような、安易でいささか国威発揚的な気分であつたようにも思ひます。

一体相撲というものが、果たして中国でどんな風に感じられるかということ、殆ど理解せずにだしてしまつた。つまり日本人と中国人が同じ儒教文化圏の民族であり、儒教的倫理という点で同質でありながらも、そこにはものすごい文化的異質性があることを考えなかつた。私はその時、これは困つたことだと発言したことがありますけれども、先ず大相撲が實際に行つてしまつたのです。

その当時の中国は、林彪事件というような

衝撃的な事件が起き、文化大革命の中で毛主席の後継者として台頭してきた林彪が一夜にして逆賊として失脚していくという状況でした。このように当時の中国がまだ国内的に非常に緊張している時に相撲をだしたのですが、中国人には何かエコノミックアニマルの象徴のようなブクブク太つた日本人が来た、というような感じを与えてしまつた。今の中国であれば少しは開かれていて、日本の相撲について興味があるわけですが、その当時は全く閉ざされた、もう何年にもわたつて階級闘争や革命だけが叫ばれていたのです。それに中国人というのは日本人と違つて、そもそも裸体に対しては非常に禁欲的であります。最近こそ水泳が盛んに奨励されて、泳ぎはするのですけれども、やはり一般には裸になることはきらいなんです。そこへ、大相撲ではなおいけないわけですね。

戦前に実は大相撲の中国興業がありました。當時は日本の半植民地だった時代ではありましたが、この時も中国人には大變悪い印象を与えているわけです。こういうことを一切無視して、日中国交だ、さあ大相撲北京場所だという形でものごとが運ばれる。これはまあ相撲ぐらいのことですと終つてしまひましたからよかつたものの、又その当時の中国

では、またそのセレモニーを見た人はごく限られていたから、それはまだよかつたものの、このままでは大変なコンフリクトを起こす。つまり文化外交だと思ってやったことが、とりかえしのつかない摩擦の種、或は反日感情の種ということになりかねないので。以上、私が申し上げましたことは、文化外交の輝かしい例と、そして全くだめな例であったといえましょう。

こういう風に考えますと、才能教育は国際社会の中でおおいに普遍性を確立しているわけですが、ただこういった議論を私がした時にも、外交政策懇談会のメンバーである著名な先生方で文化外交そのものをよく考えていらっしゃる方々も加わっておられたんですが、それにもかかわらず、皆さんはまだ才能教育について誤解をしていました。それはやっぱり才能教育というものは天才教育、英才教育ではないか、中嶋さんの言うことはわかるけれども、日本人が皆才能教育をやった世界のコンクールのメダルを全部とるようになったら、これは忽ち反日感情のもてではないかと言うのですね。最近の日本は、昨日もテレビでライシャワーさんの「ザ・ジャパニーズ」をやっていましたし、私の友人でもある同じ

ハーバード大学のエズラ・ボーゲル教授が、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という本を書いております。ボーゲルさんはもともと中国研究者なのですが、中国研究から日本研究に転じて、日本はいかに効率のいい社会であるかということ、そして日本はとにかく素晴らしいんだ、ということを書いているのです。最近の日本に対するそういう評価は大変有難いことなんですが、そうであるだけに、例えば登山でも日本人はこの頃ヨーロッパを席巻して、主な山を全部登ってしまふ、こんな状況の中で、日本人が音楽のコンクールでも皆一位になってしまふ、技術的にはもうそこまでいくんじゃないか、それが余りひどくなると、ある種のイエロー・ペリル(Yellow Peril) 黄禍論的な脅威をヨーロッパ人にもたらすのではないか、というようなことを心配する方がありました。

やはり才能教育というのは、何か音楽コンクールに優勝するような天才を育てることに大きなことを見出している、という風に、まだまだ日本の第一級のインテリの人たちできえも考えているのです。このことは、それらの人たちの認識不足というよりは、才能教育に対する外からのイメージがそうなのだと思われ、自身も感じざるを得ない点があるわけです。

しかし、皆さんの前でこんなことを言う必要は全くないわけで、才能教育の実際はそうではないと思っています。

才能教育が人間の豊かな個性を開発するということ、これはあらゆる教育に通ずるものだと思います。もともと教育という言葉の発生は、中国の「孟子」が原典です。英語のエデュケーションも同じような意味ですが、幼児のうちには大人が厳しく反復させて、くりかえしくりかえし幼児に学芸や技術を授けていくことです。ここに一つの教育の根本的な原則があります。これはしばしば誤解され、何かそういう風に行うことが、つめ込み主義であるとか、或は能力開発的な、みな人間をメカニク的なテクノロジ(技術)一点ばりの人間をつくるのではないか、という誤解ですね。私はそうではないと思います。大人が子供に技芸を厳しく授けるといふこと、或は基本的な知識を厳しく教えることがそもそも教育という語の根元です。私自身も大学の教師になり、大学紛争の渦中であつて大変つらい思いをしたことがありますけれども、ま、一時はそういう若者のある種のわがままな逆があり、それに対して教師がおおじてしまつて甘やかせてしまつたことは、教師が教育

の本来の立脚点を自ら放棄してしまったような気がするので。やはり個性というのは厳しい反復の中で開花するのであって、甘やかすことの中で育っていくとは思いません。私どもの大学は語学を重視している大学ですが、これはまさに、語学教育についても言えることだと思います。

中国における文化大革命の時期には、これと全く反対のことが行われました。例えば、学生が白紙答案を出して先生にプロテストする、そうするとその学生が英雄視されましてこれは毛沢東の教えである、毛沢東の思想とというのはそういう階級闘争なのだという形で大要評価されたのですが、これによって中国自身の教育がいかにゆがめられてしまったか、その間中国では教育というものが全くなされていなかったということを、今痛切に中国の人たちは反省しているわけです。この点でも、才能教育もっている方法論、或は評価観というものは、やはり普遍的なものだと考えていいのではないのでしょうか。

それからもう一つこの問題についてお話ししてみたいと思います。先程、文化外交と申しましたが、日本は最近たいへん文化づき、芸術づいてるわけですね。そういう状況の

中で、外交がもっと文化を中心に据えていかなければならないということについては、誰もが賛成するわけですが、一体それでは何が文化外交であるかということになりますと、これは中々むずかしい問題になってきます。従来は、生花とか能、歌舞伎、或は柔道とか空手など、日本的な伝統技術と言われているものを、これが日本文化だという形で外に出しておりました。これは確かに大きな意味のあることですが、しかし今日の日本については国際的にもかなり知られてきましたし、日本の文化のそういうエッセンスだけを外に出すことによって、果たしてこれが今の日本であるかという風に考えてみますと、能や歌舞伎というものも私たちの日常性から一般には懸け離れた非常に特殊なもので、これを外に出すこと自体に大きな問題があるような気がします。

各地の在外公館や文化センターに行きますと、いつも富士山の絵や日本人形が飾ってあり、又お茶やお花があるということ、そういう時代は文化外交や文化交流の第一段階であって、今日ではもはやそんな時代ではないような気がします。私たちはもっとも通常の日本、ありのままの日本というものをそのまま外に出すことが必要だと思います。例えば

現在の日本は大変な情報社会です。世界で日本ほど情報過多なところは少ない。しかも日本人のもっている情報社会への適応能力は大変なものですから、そういう面を外に出すことも必要でしょう。又、日本は教育水準が非常に高い。このことも大要誇るべきことだと思います。才能教育はまさにこの日本の教育水準の高さを外国に出しているわけですね。更にヨーロッパ的なもの、ヨーロッパの価値観を日本が受容しながら、ある意味でヨーロッパ以上に達成してしまったということ、ここに普遍性があるわけです。

私は昨年の秋まで一年間、オーストラリアに国際交流基金から派遣されて行っていたわけですが、これは長期学者芸術家派遣計画にものとずいたものです。従来学術交流というのは、いわばジャパノロジー、日本語の先生とか日本文化なり日本史の先生を送るというのがこの国際交流基金でも普通の例ですが、ところが、最近ではオーストラリア自身が非常にアジア・中国などに大きな関心をもち始めて、かつては英連邦の一員であったこの国が今やヨーロッパ国家ヨーロッパ社会としてのオーストラリアではなくして、まさにアジアの一員であるという新しいアイデンティティ

(identity)、彼らの民族のよりどころを確立しようとしているのです。そういう中で、日本や中国に対する関心が非常にたかまり、オーストラリア国立大学に現在中国センターという研究機関が出来まして、そこに私は客員教授として招かれて行ったわけです。それを日本の国際交流基金がサポートしてくれたわけです。私自身は日本研究者でも、日本語の先生でもない。そういう意味で初めての学術交流のケースでした。

このような形で、日本が学術交流に貢献し得る水準は高いのです。もともと私のやっている現代中国研究(Contemporary China Studies)などは、アメリカの水準が非常に高くて、そこから私たちはいろいろなるものを学んできました。しかしながら、逆に今ではアメリカにも負けないし、むしろ世界の学界の人達が日本に注目しているのです。そういうものを出していくことは、日本人が達成した一つの普遍性だと思います。こうしたかたちの学術交流もこれからの日本の文化外交のターゲット、目玉商品になっていくのではないのでしょうか。

ヨーロッパやアメリカに行つて、或は私はオーストラリアにいて、キャンベラのスクール・オブ・ミュージックを訪れますと、ここ

でもスズキ・メソッドは大変評価されていて大変うれいんですね。私自身もバイオリンを素人としては弾いておりますけれども、全く皆さんのようなところからは離れているにもかかわらず、やっぱりうれしい。と同時にアジア全般また中国という、これまで全然交流の少ない領域、こういう所にこそ才能教育の成果みたいなものが導入されるといいと思ふんです。かつてたしか日本フィルがマレーシアのクワラルンプルでコンサートを開き、大変な成果をあげたことがあります。最近日本のオーケストラもアジアにとまどき行くようですが、やはりその数は非常に少ない。なんといっても音楽には国境がない。その上先程申しましたようなカルチュラル・コンフリクト、つまり文化的な摩擦をひき起こすことがもつとも少ない領域です。

さて、才能教育は一人の個性をどこまで演奏家として伸ばしていくかということよりも、一人の子供がどういう形で音楽に親しみ、音楽に接する過程でどのように個性がひらかれていくかというプロセスを大事にするという教育運動だと、私は思ふんです。その結果よりもプロセスが大切であるということになりますと、尚更、今日のアジア諸国に対しては、

才能教育のようなものももっと意味をもっていいのではないかと考えます。勿論今日のアジアは大変な激動と流動をくりかえしておりますから、まだそんな余裕はないのかも知れませんが、実はそうではなくて、これは私も最終職後に、本当におなかの空いている時にバイオリンの音楽を目の前にした。まさにそういう時にこそ、人間の心にふれる音楽というものが意味をもつのではないかと風にかえします。

これは私自身が体験したことであり、皆さんに若干の注文があるのですが、今日では才能教育をうける人口が非常に多くなってきました。日本ではもう二万人位なんでしょうか、アメリカでは十万人と言われている。これらの人々がすべて指導者になるわけでも、又演奏家になるわけでもないのです。私自身もそうだったわけです。とにかく才能教育を通過する人口というのは非常に多いわけです。そういう人たちが、将来、どういう職業選択といえますか進路を切りひらいていくかという点、この点はかなりいろいろの問題をふくんでいるような気がします。私は、豊田耕児さんのような素晴らしい方がすぐ近くにいたので、とても自分はバイオリンの演奏家にはなれないと初めからあきらめた形でしたが、

幼少年期にバイオリンのために費やす時間がかなり大きいわけですから、将来の職業選択の点では、ある一定の時期に才能教育を受ける側の、その本人なりその母親の冷静な自己判定が必要になってくると思うんです。でもその辺をどういう風に考えていけばよいのか、

大体私どもの周囲を見廻しても、中学を終って高校に行く位の時にやめていく人がかなりあるようです。私の同年輩の友人でも、昭和二十二年頃、松商学園での初めての演奏会で無窮動をそろって弾いた者のうち、この中でともかく最後までバイオリンを続けたのは私だけで、皆やめてしまったんですね。受験などとぶつかった場合に、かなりな時間をバイオリンのレッスンにとるために、折角ながい間努力してきたものをやめてしまう。又辛うじてそれを続けてきても、今度は大学から社会人になるあたりでやめてしまうんですね。そうして一たびやめると、一般には殆ど弾かなくなるのではないのでしょうか。現在の才能教育の在籍者が二万人としますと、その通過人口はもつとはるかに多いわけですが、それらの人たちがそんな具合でやめてしまうというのは、やや大げさに言う文化の内部的価値がそこで大きく損失することであり、これを持続させるかという問題、又持続させなが

らいか本人の夫々の能力との兼ね合いを考えていくかということは、才能教育運動がこれ程膨大な存在になっている現在、皆さま方にいろいろお考えいただいでよい問題ではないかという気がいたします。

又一面に、日本人は才能教育という素晴らしいメソッドをもち、それが世界的な普遍性を獲得しながら、音楽を生活の中にとり入れることがまだまだ下手なようです。最近では、自分では中々弾く時間がありませんので、国際会議などで例えばウィーンに行ったとき、或はモスクワで、音楽会だけは欠かさないんですが、やはり彼らが音楽に接する態度と、日本人の音楽会に行く態度そのものには違いがあります。そもそも音楽に対する考え方が違うのかも知れません。レッスンから帰って来た子供に、アメリカではお母さんが「今日は楽しかった」と聞くんですが、日本の場合は「今日はどうでしょうか。」「今日はどこまで進んだの」と聞くのではないのでしょうか。(笑)まあ、こういう差が、実は音楽というものをどういう風に自分の人生の中で纏にしていこうかということの、根本的な違いではないでしょうか。

そこでもう一つ、才能教育がもつと更に大

きな普遍性を獲得していくためには、これらの問題を自分の手で解決していく必要があります。そのいくつかの問題が解かれていった時に、才能教育はまさに二十世紀の人類が到達した生きた文化遺産として、そのもつ意味が益々大きくなるのではないかという気がいたします。

